

売薬の意匠あれこれ 〈その28〉江戸期売薬の広告【その⑤】

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長 平井 有 (ひらい・たもつ)

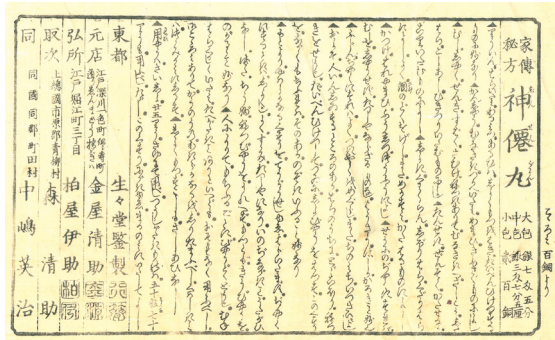
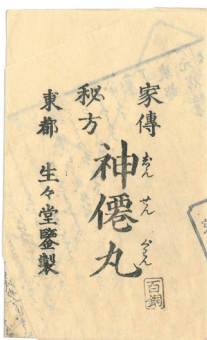
「売薬の意匠あれこれ」ではこれまで明治期から昭和期にかけての売薬ポスターや特売の広告を紹介してきました。

今回はそれら近代の紙によるチラシやビラなどの売薬のチラシ広告の源流ともいえる江戸期の「引札(ひきふだ)」などの広告を取り上げます。

引札とは顧客を引き寄せて、利益を引き寄せることからつけられた名称ですが、その始まりは現存が確認されているものとしては今から300年以上も昔の天和3年(1683)の日本橋駿

河町(現日本橋室町)に開業した越後屋が開店の際に配った引札「現金安売り掛値なし(正札(しょうふだ)販売)」が嚆矢(こうし)といわれています。

その背景には幕政の安定に伴って商品経済の向上や庶民の購買力が高まってきたこと、大量の印刷物の作成・配布が可能となったことなどがあると思われますが、文化・文政期(1804～30年)にかけては盛んに行われるようになりました。



①

① 家傳 秘方「神僊丸(しんせんがん)」

変体仮名などで書かれた古文書の読解は難しいものですが、その刷り物(印刷物)が江戸期のものであるか、それ以降のものであるかを見極めるのは、書かれている地名が東京か江戸か? 書かれている価格が円か銭か、匁(もんめ)など江戸期の貨幣単位か? などからおおよそ推定できます。

この引札は現在の東京都江東区深川近辺にあった製薬業者「生々堂」の作っていた神僊丸の引札ですが、実物の薬の入った(左側) 薬袋を広げると、そこにはこの引札と同じものが印刷されており、現代の添付文書と同じように効能や用法がわかるようになっています。

② 古地図(絵地図)「大和巡り道筋心得」

江戸時代半ばになり時代が落ち着いてきますと「お伊勢参り」や奈良の古寺や奈良県南部にある修験道の聖地大峰山(おおみねさん)を巡礼することが庶民の間でも盛んに行われるようになりました。

この絵図は大阪・天王寺あたりから京～奈良～とうのみね(多武峰)～吉野山～大峰山の巡礼ツアー案内図ともいえるものですが、各街道沿いの名所、名物、名産品なども紹介して観光ガイドを兼ねたものです。

右上に蝦蟇(ガマ)の絵の描かれた店舗があり、左上端には「御免金紅丹(きんこうたん) 萬病毒けし」の広告が書かれています。

かつて成田山、善光寺、川崎大師などの神社仏閣の門前などでは多くの薬が売られ道中土産として買い求められましたが、この絵地図からもそのようなことが見えてきます。

③ 「漢蘭丸」引札

鎖国が国是であった江戸時代、朝鮮、中国以外に通商や往来が唯一認められていたのが阿蘭陀(オランダ)でした。

オランダを通じて日本に入ってきたヨーロッパの学問を「蘭学」と総称しますが、特に医業面では蘭学というところとシヤボルトや杉田玄白で有名な南蛮医学を指すものととらえられています。杉田玄白らによる解剖学書『ターヘル・アナトミア』の翻訳本である『解體新書』が出版されたのは安永3年(1774)のことですが、この頃から蘭学で用いられている医薬品も国内に持ち込まれるようになり、それらを調合した売薬が販売されるようになりました。

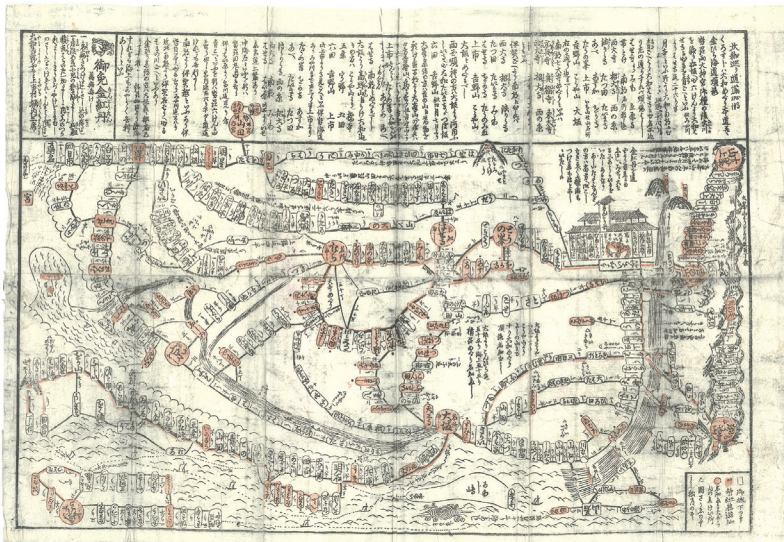
漢蘭丸は尾州(尾張藩、愛知県から岐阜県にかけてのエリア)名古屋で作られていた小児の虫下しの薬で、左側に書かれている成分には人参、真珠、麝香(じゃこう)、龍腦、犀角(さいかく)、熊胆(ゆうたん)など漢方の高貴薬のほか、カタカナでセメンシーナ(サントニン含有)、キナン塩(キニーネ)などの洋薬も見られます。なお御免とは幕府に正式に認可された薬との意味です。

④ 「だっそ 妙薬」

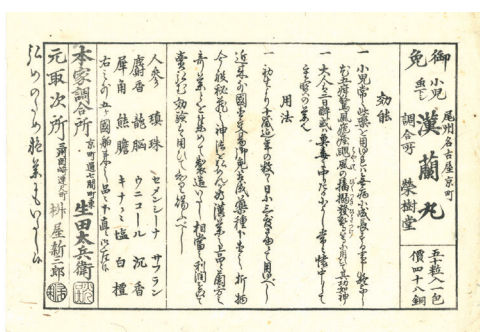
上段の京都の二字の間に天皇家の紋章である「菊の御紋」の印が権威づけに押されています。京都烏丸通五条下ルの宮川薬製で作られていた薬です。

だっそ(脱疽 別名壊疽(えそ))とは「血流低下により組織が死んで細菌感染も起こして黒色に変化したもので、現代でも閉塞性動脈硬化症や糖尿病で発症、切断を余儀なくされることもあります。ご丁寧にも脱疽の二字に「おちる」「くさる」とのフリガナが振られています。

②



③



④

